

館報 教育記念館

No. 83
平成26年10月 発行

きらめき未来塾 右脳活用道場（漫画）



きらめき未来塾 お笑い道場



特別展
「肖像画で見る
郷土の先賢」



主な内容

- ◎教育時評 富山県中学校長会 会長 吉江 友秋 2
- ◎第24回 郷土の先賢顕彰者 辺見じゅん・稲垣 示 3
大谷竹次郎・継続顕彰者
- ◎特別展「肖像画で見る郷土の先賢」 6
- ◎恒例展「第5回児童・生徒によるものづくり展」
- ◎恒例展「第12回さんすうワールド展」 7
- ◎「きらめき未来塾」 思考道場 お笑い道場 右脳活用道場
- ◎平成26年度「学ぼう！ふるさと未来」支援事業
- ◎恒例展「第11回子どもの目・自然不思議発見写真展」 8



発行所／公益財団法人 富山県ひとつくり財団 富山県教育記念館 〒930-0018 富山市千歳町 1-5-1
TEL (076) 444-2000 FAX (076) 444-2001 E-mail: toyama@t-hito.or.jp http://www.t-hito.or.jp
(教育記念館会議室ご利用の場合 ☎(076) 433-2770)

発行人／富山県教育記念館 館長 伏黒 昇 印刷所／いおざき印刷株式会社



言語活動の充実をと言うけれど

富山県中学校長会

会長 吉江 友秋

「生きる力」「理念」は変わりません。「学習指導要領」が変わりますと銘打って、新学習指導要領がスタートした。中学校においては、平成24年度から完全実施となり3年目を迎えている。平成23年に文科省が保護者向けに作成・配布したリーフレットのトップには、四つのメッセージが載っている。

- ① 学校で学ぶ内容が充実します。
- ② 授業の時間数が増加します。
- ③ 子どもたちの「生きる力」を育みます。
- ④ 子どもたちの「生きる力」を育むためには、学校・家庭・地域の連携・協力が必要です。

そして、教員向けの学習指導要領の改定ポイントでは、学ぶ内容、教育内容に関する主な改善事項として、「言語活動の充実」を筆頭に「理数教育」や「伝統や文化に関する教育」、「道徳教育」、「体験活動」、「外国語教育」の充実などが示された。

平成23年度から現任校で勤務する校長としては、保護者に対して、上記①～④のメッセージを、本校では「充分できていますよ、充実していますよ」と言えないもどかしさに苦しんでいる。正直なところ、現在、本校を含め、どの中学校も教職員一体となり、新学習指導要領に沿った授業改善に一生懸命励んでいる途中と考える。

話は変わるが、東京へ出張する機会があり、夕方の電車で三日続けて乗った。仲が良さそうな中・高校生のグループがところどころの駅で電車に乗り込んでくる。様子を見ると、満員電車ではないのに、友達同士でほとんど会話をしない。各自がスマホや携帯を取り出し、ゲームやメール、イヤホンをつけて音楽を聴くなどほとんど声がしない。自分の降りる駅になったら手を振って去っていく。ゲームやメールならいつでもできる。

せっかく友達が近くにいるのに、なぜ話さないのかと不思議に感じてしまう。

私も高校3年間で電車通学をしたが、友達とよくしゃべり、大人の乗客からは「やかましい」と叱られ、それでも友との話題に事欠かず、ひそひそと小さな声で、青春談議に花を咲かせた。勉強や進路の悩み、困りごとの相談など、どんな話をしたか、今でも当時の友達に会うと思い出すことも多い。

出張から戻り職員室にいと、顔色の悪い生徒がやってきた。何人もの先生方がいるのだが、黙ったまま職員室の入り口近くで立っている。先生方の方から、「どうしたの?」「どこか都合が悪いの?」「保健室で相談してみるか」と優しく話しかけられて初めてしゃべり出す。生徒が保健室へ向かった後に、「本人に言わせてください。中学生ですから」と先生方をお願いした。なお、本校の職員室の入り口には、「姿勢を正して」「失礼します。」「〇〇先生に〇〇の用事できました。」職員室を出るときには、「失礼しました。」と掲示してある。

世の中全体が優しくなってきた。少子化もあり、子どもたちも大切にされ育ってきている。子どもたちのコミュニケーション能力の育成や言語活動の充実も学校教育の一つの課題となっているが、案外、親や教師が口数を少なくし、子ども自身に話をさせるようにすることが大切なのではないだろうか。

新学習指導要領、言語活動の充実も道半ばの中、道徳の教科化や土曜授業の復活、小学校外国語活動の英語への教科化などは、次期学習指導要領の改訂を見ずに先行実施されそうな世の中の勢いに、焦りを感じるものの、日々の授業改善や生活指導にこそ地道に取り組む必要があると考える。

第24回 郷土先賢室顕彰者紹介



富山を慕い続けたノンフィクション作家・歌人

辺見 じゅん (1939~2011)

辺見じゅんは、昭和14年(1939)、角川書店を創業した角川源義と鈴木富美子の長女として、中新川郡水橋町(現富山市)に生まれた。本名、角川真弓。

現在も水橋駅前に残る家で、6歳まで祖父母に育てられた。祖父母から聞いた民話のおもしろさが、後に民話の聞き書きへとつながった。小学校からは両親、二人の弟と東京で暮らし始めた。源義が中井照子と再婚したため、4年生のとき弟と水橋の家に預けられたが、翌春から東京での暮らしが再び始まった。高校時代には文学好きの学生が角川邸に集まり、文芸会を結成し同人誌を創刊した。この同人誌に短編小説「母と子」を発表している。文学への憧れを深め、自分の行くべき道が文学しかないことを自覚していった。

辺見の文学は、民話や昔話の聞き取りから出発した。関係者一人一人を訪ねて丹念に、やがて相手にとって“母”のような存在として話を聞き取った。この手法は後のノンフィクション作品に生かされている。昭和51年(1976)、幼い頃の水橋での蔵の間のエピソードが出てくる「呪われたシルク・ロード」が、第7回大宅壮一ノンフィクション賞の最終候補に残った。結果は落選だったが、作家辺見じゅんとしての一步を踏み出した。14年後の平成2年(1990)、「収容所(ラーゲリ)から来た遺書」で同賞を射止めた。

1970年代後半、各地を訪ね「ふるさと幻視行」等聞き書きを生かしたルポルタージュ的な作品を発表している。その途上で、昭和54年(1979)頃から戦艦大和の生存者を訪ねる旅を始めた。これが「男たちの大和」(1983)に結実する。辺見はこのときの聞き書きについて、対談で「娘のようにして聞いたり、年若い少年兵だった人にとっては妹のようであったりしたのが、だんだん母親のようになって聞くという不思議な気持ちにさせられました」と語っている。

辺見は、短歌会「かたかごの会」を平成11年(1999)に、「海鳴りの会」を平成13年(2001)に富山で始め、月1回自ら指導に当たった。平成19年(2007)には両会を支部とする「弦(げん)短歌会」を設立し、富山発の短歌文芸誌「弦」を創刊した。

平成14年(2002)2月、「幻戯(げんぎ)書房」を東京都千代田区神田に設立した。社名は父の源義が自分の名前の音読みにちなんで東京都杉並区の自宅を「幻戯山房」と呼んだことに由来する。「自分の好きな本だけを出すためにもう一度出版社をつくりたい」という源義の思いを引き継いでの設立であった。

平成22年(2010)、「高志の国文学館」館長就任が内定。平成23年(2011)9月、東京都の自宅で脳出血のため急逝、享年72歳。開館10か月前であった。「音楽も踊りもアニメもやりたい。子供たちが遊ぶ部屋があってもいい。それからおいしい料理も」と思い描いた文学館は、来館者でにぎわっている。「海鳴りは人恋ふるかな古志といふまぶしき山河われの故郷(ふるさと)」と刻まれた辺見の歌碑が出迎える。

平成27年度も引き続き顕彰される郷土先賢者



黒部の自然が生んだ偉大な彫刻家

佐々木 大樹 (1889~1978)

明治22年(1889)、父次郎四郎、母そわの三男として、下新川郡愛本村大字音沢村(現在の黒部市宇奈月町音沢)に生まれた。本名は長次郎という。父は、農業のかたわら酒の販売や、宇奈月温泉の源泉地である黒雉温泉を経営するなど、経済的には恵まれた家庭であった。幼いころから、絵を描いたり、彫り物をしたりすることが好きで、黒部川に流れ着くいろいろな流木を集めていた。この木との出会いが、後の木彫へとつながっていった。

明治37年(1904)、富山県立工芸学校(現在の高岡工芸高等学校)の木工科彫刻部本科に入学し、本格的に木彫りを学んだ。卒業後、東京美術学校彫刻科へ進み、竹内久一、高村光雲といった日本を代表する芸術家のもとで近代彫刻の精神と在り方を学び、ひたむきに制作に取り組んだ。

大正9年(1920)、第2回帝展に「誕生の頃」を初出品し、特選を受けた。昭和3年(1928)には「紫津久」という作品で、今の芸術院賞にあたる帝国美術院賞(彫刻で最高の賞)を受けた。

昭和9年(1934)、帝国美術学校(現在の武蔵野美術大学)の教授となり、翌年、多摩帝国美術学校(現在の多摩美術大学)創立とともに教授となり、多くの学生に彫刻を教えた。

昭和33年(1958)、日展評議員となり、昭和46年(1971)には勲四等旭日小綬章を受け、宇奈月町名誉町民に推挙された。

昭和50年(1975)から「ふるさとの地に、生涯をかけた作品を残し、郷土の繁栄と未来の安泰を祈りたい。」という願いのもと、「平和の像」の制作を始めたが、そのさ中の昭和53年(1978)に帰らぬ人となった。



不屈の精神で世界一の製鉄業を目指し 地域振興に尽くした実業家

大谷 竹次郎 (1895~1971)

大谷竹次郎は明治28年(1895)小作農であった父次兵衛、母いとりの次男として、西砺波郡正得村(現小矢部市正得)に生まれた。大正元年(1912)17歳のとき兄米太郎を頼って上京し、相撲部屋に入門して「金ヶ崎」のしこ名で関取を目指した。しかし、体が小さくて昇進がかなわず2年後深川で鉄を削る下請け工場を始めた兄に呼びよせられ共に働くことになった。これが実業家としての第一歩になった。

第一次世界大戦の好景気にも乗って、兄弟で経営する東京ロール旋削所は順調に業績を伸ばした。竹次郎は、夜学に通って簿記を勉強し休まず働き続けた。後に、大型台風や関東大震災等に見舞われ大きな被害を受けるが、持ち前の粘り強さで再建に取り組み拡大させていった。昭和9年(1934)、兄の命を受け尼崎市に建設した東京ロール製作所尼崎工場が、関西地区での竹次郎単独による事業経営がスタートした。軍需景気に支えられ、昭和14年(1939)に設立した大谷製鉄株式会社は関西でその地位を確固たるものにした。また、「日本の国土は狭い」という思いから、場違いとも見られる浚渫事業を起こし、関西地区の他、境港市等の臨海地の造成も手掛けた。

竹次郎の夢は、高炉をつくることであった。昭和14年(1939)に大阪市淀川区外島に45万坪の広大な用地を造り、翌年には資本金が全国9位となる大谷重工業を創設し高炉建設の準備を進めた。そして、昭和19年(1944)、日本で高炉がある3つ目の製鉄所がついに完成した。ところが、戦況悪化の中、軍の命令で火入れを見ることはなかった。夢を諦めなかった竹次郎は、昭和33年(1958)、再び高炉計画を発表し、用地や港湾整備を進め、八幡製鉄所出身の技師を招いた。しかし今度も、国が建設を認めず、竹次郎はついに高炉を断念した。それでも竹次郎が整備した広大な外島用地は、阪神工業地帯発展のため大きな役割を果たした。高炉で夢破れた竹次郎であるが、電気炉においては世界一を成し遂げることができた。竹次郎が経営する昭和電極(現SECカーボン)は、昭和37年(1962)に世界最大の電気炉に用いる24インチの太物電極の製品化に成功し、太物電極のパイオニアとして今日でも世界から高い評価を受けている。

このように竹次郎は、大谷重工業の他多くの会社経営に携わり、一代で巨万の富を築いた。しかし、常におごらず質素な生活をしながら、社員や隣人を愛する気持ちをもち続けた。その思いは、生まれ育った小矢部市や実業家として暮らした西宮市の地域振興にも表れている。昭和39年(1964)には、石動小学校と大谷小学校の新校舎建設に対して2億円という巨額の篤志を寄せた。また昭和46年(1971)には、西宮市大谷記念美術館を造るために、自宅・敷地(2千坪)と美術品(630点)、運営費(約16億円)を西宮市に寄贈した。

不屈の精神で世界一を目指し、度重なる困難を乗り越え、日本の製鉄・鉄鋼業をリードするとともに、資産を地域振興に役立てた大谷竹次郎は、昭和46年(1971)11月、76年の生涯を静かに終えた。

平成27年度も引き続き顕彰される郷土先賢者



農家を救う うまい米づくりにかけた人

杉谷 文之 (1907~1985)

明治40年(1907)12月1日 中新川郡柿沢村新屋(現上市町新屋)に父文作、母つうの長男として生まれる。柿沢小学校卒業後、県立上市農学校、三重高等農林学校、京都帝国大学農業科へと進み、昭和7年24歳で農林省に入省、昭和27年に新潟農業試験場場長に就任。翌年に「越南17号」(後のコシヒカリ)の種籾が福井県から送られてきた。

コシヒカリは、味はよいが栽培が難しく、「稲が倒れる」「いもち病になりやすい」「収穫量が少ない」との理由で「芸者稲」と揶揄され、富山・石川両県のみならず、開発した福井県でさえ栽培を断念していた。しかし、文之は「量より質、おいしい米が求められる時代が来る。米は人間の食べ物であり、おいしくなければならない。」との信念をもっており、技師らに「栽培法でカバーできる欠陥は致命的な欠陥にあらず」と説き、肥料の与えかたを抑えたり、水管理を工夫したりすることで、草丈を抑え、いもち病にかかりにくくする栽培方法を確立していった。

昭和37年、新潟県職員を退職し、上市町に帰郷した。55歳であった。その後、コシヒカリは「うまいコメ」として昭和54年に全国の作付面積で1位となる。

昭和41年には並河農業技術賞を受賞。50年からは富山県農政審議会委員を務め、昭和60年、77歳の生涯を閉じた。



自由民権運動の先覚者

稲垣 示 (1849~1902)

稲垣示は、嘉永2年(1849)、射水郡棚田村(現射水市棚田)の豪農稲垣又平の長男として生まれる。何不自由のない境遇の中に育ち、14歳で金沢藩校壮猶館へ入り、砲術・馬術・医術・航海術・測量術等を学んだ。明治維新に際し、示は「支配なき後は有力農民や商人から選ばれた有志が、維新期の行政を担わねばならない。そのためにはまず学問を修め、新しい時代の方向を知らねばならない」と考え、高岡の野上文山の待賢塾に入り、経書、詩を学んだ。ほどなく父病気のため家業を継ぐこととなったが、寺子屋教師の傍ら自由民権運動の同志と糾合し、率先して政界に身を投じていくことになった。

明治12年(1879)板垣退助の民権運動に呼応し自由党に入党した示は「人民に自由の何たるかを知らせ、天から与えられた権利に目覚めさせることが何よりの急務である」と県内各地を遊説した。翌13年、県下最初の政治結社「北立社」を結成した。当時、各県からの国会開設請願書は藩閥政治のもと却下されていたが、示は東京にて4度、太政大臣の手元に渡すように迫るなど、その熱意は他県の有志にも広く知られるところとなり「越中の自由は射水の森より」と言われた。演説では、巨体を震わし目をむいて吠えるように叫ぶ何者にも屈せぬ気概の示に、聴衆は手に汗を握る思いで感動したという。明治15年(1882)、「北立自由党」を結成し「北陸日報」等を発刊するが、政府の弾圧で廃刊となる。しかし、示の意気は衰えることなく、「何の屁の屁の合羽ぞ」と同士を鼓舞した。石川県議員となった示は、県令と衝突し県議の職を除名された。

明治16年(1883)、自由党の拡大を図る示は、瑞龍寺で北陸7州有志大懇親会を開催した。全国各地から参加者を集め、「稲垣君の演説、眉を張り、腕を撫し壮漢の大鉄槌を下すが如く、秋鶉の天外より落ち来るが如く天を劈き地を貫くの気あり」と大盛会であった。その後、官憲の弾圧は厳しさを増し全国各地で党員が逮捕され北立自由党は解党、示は禁固1か月罰金40円を科せられた。明治18年(1885)、清国の支配下にあった朝鮮独立の手助けをした大阪事件で逮捕され、禁固5年の刑に服した。示は「自由」の二字を染め抜いた羽織を着て、「日本の夜明けは遠い。しかし、必ずやってくる」と言ったという。服役中に詠んだ歌は「狭衣集」として後に発行され、和歌の伝統的美意識を踏まえつつも、新しい時代の現実を目を向けている。

明治22年(1889)憲法発布の大赦で出獄、示は熱狂的な出迎えを受けた。高岡における慰労会には千人が集まったという。その後、「北陸公論」を刊行して言論活動を続け、明治27年(1894)第2回衆議院選挙に出馬し最高点で当選、第3回にも当選した。また、田中正造の足尾銅山鉍毒事件糾弾の応援をしたり、「普通選挙期成同盟」を共同で結成したりと活躍の場は全国に広がっていった。明治35年(1902)第7回衆議院選挙投票日前日、応援演説後急逝した。自由民権運動の先覚者、享年53歳だった。

平成27年度も引き続き顕彰される郷土先賢者



富山商人の真骨頂を示した実業家

中田 清兵衛 (851~1916)

実業家。富山町(現富山市)常磐町の薬業家九代密田林蔵の五男として明治9年(1876)に生まれ、幼名を徳治郎といった。県立富山中学校から金沢医科専門学校薬業科(現金沢大学薬学部)へ進学し、卒業後、軍隊に入隊した。明治30年(1897)年、富山貯蓄銀行取締役に就任し、以後50年間にわたり銀行業と関わった。

明治33年(1900)年4月、14代中田清兵衛の養子となる。大正5年(1916)11月、15代中田清兵衛を襲名するとともに、家業(薬業と書店)だけではなく、富山第十二国立銀行の頭取も推されて引き継いだ。

清兵衛は頭取として、堅実な経営を第一とした。昭和18年(1943)、清兵衛が中心となり、十二銀行、高岡銀行、中越銀行、富山銀行の四銀行が合併し、新しく北陸銀行が誕生した。清兵衛は初代頭取に就任し、昭和21年(1946)、病気のため辞任するまで頭取を務めた。社会や公共のために尽力し、県内のみならず、北陸地方の教育、金融、産業界に多大な貢献をした。昭和41年(1966)、富山市は清兵衛を「富山名誉市民」に推戴し、永年の労に報いた。

昭和45年(1970)、東京の別邸にて永眠。享年93歳。

特別展

「肖像画で見る郷土の先賢」

4月26日(土)～5月25日(日)



当館は郷土先賢部会を設置し、昭和62年から、129名の先賢を顕彰してきました。今回は、初期の頃、置県百年記念事業として描かれた肖像画の中から、教育・学術分野の22名の肖像を展示、その業績を紹介しました。

郷土先賢部会 顧問：中村啓志

専門員：関原秀明、松本 純、平野 強、宮崎 靖、福田 暁、松井功一、中山 均、根塚昌志

恒例展

第5回「児童・生徒によるものづくり展」

6月11日(水)～7月13日(日)



県内には、伝統的、創作的な作品の製作に取り組んでいる小・中・高等学校が多くみられます。当館では、その発表の場のひとつとして「児童生徒によるものづくり展」を開催しています。

今年は215点の作品が寄せられました。来場者はじっくりと作品を鑑賞し、作品の多彩さに驚いたり、技術の高さに感心したりしていました。

きらめき未来塾（夏休み期間中）

思考道場

講師 秋山 仁

（東京理科大学 理数教育研究センター長）

県内講師 須古 充、中野昌生、舟木麻衣、

馬場 剛、宮本亜貴子



思考道場スペシャル公開授業

お笑い道場 講師 三遊亭 圓窓（落語家）

右脳活用道場 講師 森 みちこ（漫画家）

元気な地域づくり活動を行う人材の育成及び支援事業

平成26年度「学ぼう！ふるさと未来」支援事業（助成対象校1校に10万円助成）



25年度 奉納米つりに参加(ひばり野小学校)

助成校

滑川市立寺家小学校

射水市立金山小学校

高岡市立牧野小学校

氷見市立久目小学校

砺波市立砺波南部小学校

恒例展

第12回 さんすうワールド展 -クイズ&パズル-

7月25日(金)~8月24日(日)



夏休み期間中に算数の面白さを味わってもらおうとクイズや立体パズルを展示しました。

訪れた人たちは、暑さを忘れ考える楽しさを味わっていました。



「子どもの目・自然不思議発見写真展」

9月4日(木)～10月12日(日)

自然への興味や関心の芽が育つことを願い、子供たちが自然界の不思議を撮影した写真の展覧会を実施しました。今年は113点の応募がありました。



4さいのカエルくん (1年)



龍の形をしたくも (2年)



トラから雲 (3年)



トンボの結婚式 (4年)



散歩の途中で見つけたかるがも (4年)



気持ちのいい朝 (4年)



神通川第2ダム (5年)



はじめて見たタマムシに感激 (6年)

これからの展示予定

- | | |
|------------------------|---------------------|
| ・特別支援学校・みんながんばってます作品展 | 10月30日(木)～11月16日(日) |
| ・富山県造形教育作品展 | 11月22日(土)～12月7日(日) |
| ・「アイデア・ロボット・フェスタ」ロボット展 | 12月13日(土)～1月18日(日) |
| ・富山県中学校美術展 | 2月1日(日)～2月15日(日) |
| ・富山県版造形教育作品展・秀作回顧展 | 2月26日(木)～4月5日(日) |



あ・と・が・き

暑い日が続き、不順な天候の多かったこの夏ですが、記念館は、きらめき未来塾やさんすうワールド展など、多くの来館者でにぎわいました。

この館報がお手元に届くころには、郷土先賢室での新しい顕彰展示が始まっています。どうぞ、富山県教育記念館へお出かけください。